
涙～さようなら～

星衣礼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泪々さようなら

【Nコード】

N8899E

【作者名】

星衣礼

【あらすじ】

どれだけ願っただろうか…。夜ベッドに入り、朝目を覚ますと、全てが元に戻っていたら、と…。

第1話：すり抜けゆく幻

ここは、ワシントンD・CにあるFBIの本庁、ジョン・エドガー・フーヴァービルリング。

その中の談話室でジョディ・スターリングを始めとする数名の捜査官達が休憩を取っていた。

ガチャ

ドアを開ける音と共に2人の男が入ってきた。

1人は長身で長髪の日系人で、もう1人は癖のあるブロンドヘアの白人である。

「あ、シュウ帰ってたの？ロバートも。」

「…ああ、今さっきな。」

そう言う赤井とは対照的に、彼の後ろにいた男は何やら意気消沈している。

「あら？ロバート、どうしたの？」

見かねたジョディは彼に尋ねた。

「…また、失敗してしまって。
すみません…。」

赤井の方を見て申し訳なさそうに言った。

「そうだったの…。」

「気にするな。何の為のパートナーだ？」

彼は去年FBIに入ってきた新米の捜査官である。

早く仕事に慣れさせる為に、上司が赤井にパートナーとして行動するように命じていた。

「本当に…すみませんでした。」

そう言い頭を下げた。

その時

【「それでは次のニュースです。」

テレビから各国の主要ニュースを告げるアナウンスが聴こえてきた。

【「日本時間の今日午後4時頃、十億円強盗事件の首謀者と思われる女性が亡くなりました。」

部屋中に戦慄が走る。

金縛りにあったかのように体が言うことを利かない。

【「日本警察は、逃亡しきれなかったことによる自殺と判断しており
ー」

ジョディは震える体を奮い立たせて遠慮がちに赤井を見た。

が、すぐに後悔することになった。
赤井は…。

彼はしばらくその場に立ちすくんでいたが、何も言わずに部屋から出て行き、
部屋には数名の捜査官が残された。

「Sir…」

先程の赤井の表情…。

ジョディは長い間赤井と共に働いてきたが、彼のあんな顔は今まで一度たりとも見たことがなかった。

涙こそ見せてはいなかったが、見ている此方が胸を締め付けられる程、切ない表情をしていた。

「…シュウ。」

第1話：すり抜けゆく幻（後書き）

こんにちは！

人物の心情を正確に描くのはとても難しいですね…。

でも、頑張りますので、最後まで読んで頂けたら幸いです！

第2話：想いは傳く…

数時間後

ジョディは自分の机に向かいぼーっとしていた。先程の彼の表情が焼き付いて頭から離れない。

（シュウ…。）

「…ディ君、ジョディ君。」

はっと意識が浮上すると目の前に上司の姿があった。

「す、すみません！考え事をしていたものですから…！」

「いや、構わんよ。」

「どうかしましたか？」

「すまないが、赤井君を探して来てくれないかね？先程から見当たらないんだ。」

「…わかりました。」

正直、気が乗らなかった。今の彼に何と声を掛ければよいのか。しかし、上司の言うことに従わないわけにはいかない。彼の行きそうなどところ探し回り、最後に仮眠室に辿り着いた。彼がここを利用することはあまりないため、探すのが最後になってしまった。しかし、ドアノブを回し中に入ると、ちょうど入り口からは見えないが少し

入ったところにあるアンティーク調のサイドテーブルと観葉植物に挟まれているソファーに座り、背もたれに背を預けて腕を組んだまま、探し人は眠っていた。

「シュウ…?」

呼び掛けるが返事はない。いつもならば、すぐに目を覚ますというのに…。

すると、赤井の口が微かに動いた。

（ーえ?ー）

戸惑いながらも赤井の正面に廻り、屈みこんだ。

「どう…したの?」

「…明…美…。」

ジヨディは驚愕した。覗き込んだ彼の目からは一筋の涙が流れていただけだ。

「シュウ、…あなた。」

胸が痛かった。

「う…。」

赤井が目を覚まし、ジヨディは焦った。

しかし、焦点が合っていないのか前をじっと見つめている。

ややあつて

「…どうした？」

「え、あ、ああ。ボスが呼んでたわよ？」

ジヨディは内心の動揺を悟られないようにして言った。

「…わかった。」

「じゃあ、先に行ってるわ。」

「…ああ。」

パタン…。

ジヨディが部屋から出て行った後、ふと、目に違和感を感じ目元を触ってみる。

（水滴…？）

ああ、そうか。自分は泣いていたのか…。）

…まさか、失って初めて自分がどれほど彼女を愛していたかに気付くとは。

…何故、こんなことになってしまったのか。何故自分たちは敵同士として出逢ってしまったのだろう。

『大君…。』

明美…。

思い出すのは彼女の笑顔。いつも側にいて自分に笑顔を振りまいてくれていた。

だけど、知っている。自分の前では明るく振る舞うが、影で隠れるようにして泣いていたことを…。

『大君ったら、またムスツとしちゃって。たまには笑ってみたら？』

明美、明美っ…！

初めて心から守りたいと想った存在だった。君の笑顔、怒った表情も、全て、全て。

だけど、結局は…守ってやれなかった…。

『大君、大君…。』

だーい好きっ！』

瞳を閉じれば溢れ出る涙と共に君の笑顔。

明美っ
…！！

後悔だけが募る。

第2話：想いは儚く…（後書き）

この2人は本当に悲しいです。

明美に対する赤井の想いは伝わったのでしょうか？

第3話：それは突然の

それから数日が過ぎた日のことだった。

「あら？ シュウは？」

ジヨディは仲間の捜査官に尋ねた。

とつくに出勤時刻を過ぎているというのに、彼はまだ来ていなかったからだ。

捜査官のうちの2人が互いに目を見合わせ、言いにくそうに言った。

「…実は、赤井。昨日の任務でミスをしたらしいんだ。しかも、致命的な。」

「え…。」

「アイツが任務に失敗したことなんて今まであったか！？」

ジヨディ達の話が聞こえたのか捜査官の1人が話に入ってきた。

「ああ。だけど、失敗が失敗だから…。ボスは激怒。大目玉喰らってたぜ？」

朝一でボスに呼び出されて出て行ったよ。今頃…処分を言われているんじゃないのか？？」

それから数時間後

ガチャ

赤井が入ってきた。
室内はしんとなる。誰も目を合わせようとせず、気まずい空気が流れる。

彼は真っ直ぐに自分の席へと向かい、そして、机の上や中の書類を纏めて鞆に詰め始めた。

「シュウ…？」

そして、詰め終わると何も言わずに部屋から出て行った。

いてもたってもおれず、仲間の捜査官の1人を連れて上司の元に赴いた。

「ボスっ！！」

「シュウの処分って！？」

「ああ、赤井君には無期限の謹慎処分を言い渡した。」

「無期限！？どうしてですか！！」

失礼だとわかっているがジョディは思わず声を荒げてしまう。

「彼の所為で我々FBIに大きな損害が出た。これは審査会にかけた結果だ。文句は言えまい。」

隣にいたロバートが恐る恐るジェームズに尋ねる。

「…解雇にならなかっただけ…マシ…ということですか…？」

「そういうことだ。」

第4話：想いの糸電話

謹慎中だから当然といえば当然だが、あれから赤井を見かけない。

今日の任務はもう終わり、本庁に戻る途中である。その途中に赤井の自宅があるため、少し寄ってみることにした。自宅にいるはずだが、部屋の灯は点いておらず部屋の中は暗闇が支配している。

ブルブル…

電話をかけるのは躊躇われたが、やはり心配だった。
出る気配はない。

「シュウ…。」

今、彼は何を考えているのだろうか。いや、そんなことはわかりきっている。一つしかないではないか。

彼を救いたい。側にいてあげたい。でも、彼はそれを望んでいないだろう…。

仲間が苦しんでいるというのに何も出来ない自分が歯痒い。

自分は赤井に対して他の仲間に対するものとはまた別の感情を抱いてしまっている。ゆえに、彼女のことを考えるとどうしても自身の中に負の感情が湧いてくる。正直彼女が羨ましいと思ったことさえあった。彼女は死に永遠に赤井の中できれいな想い出となり生き続けるだろう。こんな汚い感情を持っている自分が嫌で堪らない。

「…はあ。」

すると

『…………Hello?』

(…!)

「シュ、シュウ!？」

自分からかけておいて何だが、まさか繋がるとは思っていなかった。

『…。』

「…シュウ?」

何も言わない赤井にジヨディは呼び掛けた。しかし、携帯の向こうは無言のまま。

(…どうしたの?)

どうしたものと困ったように眉を寄せるがジヨディはそれ以上何も言わず、じっと黙ったままでいた。

それからどれだけ時間が経っただろうか…。

『……………すまない。』

たった一言。それだけ言うと電話が切れた。

ツーツー…

「シュウ…?」

“すまない”

それはどういう意味？？

「…シュウ。」

ジョディは携帯を閉じ、彼がいるであろう暗闇の中を見つめた。
そして、目を伏せ、しばし考え込んでいたが、やがて車を発進させ
た。

第5話：深海よりも深い場所で

「Good morning, Ms. Starling!」

「Good morning, Robert!」

エントランスで会った部下と挨拶をする。

「…そういえば、…Mr. 赤井…いつまで謹慎なんですか?」

彼は言いにくそうに尋ねた。

「さあ…。私にはわからないわ。」

“…すまない。”

そういえば、本当にあれはどういう意味だったのかしら?

「…昨日、彼に電話したの。」

「!…でも、繋がりませんでしたよね?」

おそらく彼も自分の上司である赤井を心配して何度も連絡を取ろうとしたんだろう。

「…初めはね。そう思ってたけど…出てくれたわ。」

「えっ!それで何て!?!」

「…ずっと無言だったんだけど、最後に一言『…すまない。』って
言って切られたの。』

ジョディがそう言うと、ロバートは考え込んだ。

「…もしかしたら…。」

「ん？」

「これは自分の勝手な見解ですけど…もしかしたら…Mr・赤井は
…貴方に聞いてほしかったんじゃないでしょうか？」

「え…？」

「えっと、その何ていうか。人間って辛い時や弱ってる時って誰か
に側にいてほしいって思うんですよ…。言葉では言わなくても、た
だ側にいてくれるだけでいいっていうか…。すみません、うまく言
えません…。」

「…いいえ。わかるわ、その気持ち…。」

（そうだったの…？ シュウ…。）

ロバートに言われて気がついた。

そうだ、赤井は決して人に自分の弱みを見せないではないか。
その赤井が、昨日、自分の電話に出たとういうことは…自分に助け
を求めていたということではないのか？

（気付いてあげられなかった…。ごめんなさい、シュウ…。）

そして、あの“すまない”は、無言のままの自分に付き合わせたか
らの謝罪…。

ああ、どうして気付いてあげられなかったんだろう…。

あれは、彼からの精一杯のSOS…。

そう思うといってもたつてもいられず、携帯を取り出し、電話をかけ
る。

不在。

その場をロバートに任せて、急いで駐車場に行き、愛車のハンドル
を取ってハイウェイを駆け抜けた。

第6話：暗い海底を照らす天の光

ピンポン…

赤井の家のインターホンを鳴らす。しかし、人の気配は感じられない。

トント

不安になりノックをした。

「シュウ？いないの…？」

いないはずはない。謹慎中だ。

トントント

「シュウ！私よ。いたら開けてちょうだい？」

しばらくすると中で、カタツという物音がした。

（…！？）

玄関に足音が近づいてくる。

そして…

ガチャ

「……。」

ジヨディは驚いた。

別に元から健康的には見えない。どちらかというと病弱に見えてしまふ。しかし、今の彼は、そんなものも通り越して全く生気が感じられない。まるで抜け殻のようだ。ろくに眠っていなかったのか、目の下には隈ができ、何より、痩せた？

「…シュウ…、あなた、大丈夫…？」

ジヨディは気遣うが、それも虚しく赤井はその場で倒れた。

「ち、ちよつと！シュウ！？」

床に激突する前になんとか抱きかかえるが、大の男を支えるのは困難であつた。

「しっかりして！」

そして、すぐに様態を診る。熱はないようだが、顔色は蒼白で、脈が速く、冷や汗をかいている。

「シュウ、歩ける？ベッドに行きましょう？」

そう言うところジヨディは赤井を寢室に運ぶ為に肩を貸した。

（…この人…こんなに軽かったかしら…？）

体重を預けてくる赤井の軽さに驚いた。寢室に向かう廊下を歩いている間、咽の奥から熱い何かが込み上げてきた。

ドサッ

やっとの思いで赤井をベッドに下ろし、ほっと一息をついた。

「…う。」

（はっ！）

「シュウ？…苦しいの？」

「…う…ん…。」

赤井はうなされていた。水桶を用意し、それにタオルを浸し、ギュッと絞った。そして濡れたタオルで額を拭ってやった。

「…う…。」

キュ

ジヨディは赤井の左手を両手で優しく包み込んで言った。

「大丈夫よ、側にいるから…安心して、ね？」

胸を焦がす切なさや狂おしいくらいの愛しさを感じた。

「大丈夫だから…。」

震える手を強く強く握り締めた。

第7話：繋いだこの手は離さない

「…ここ、は…？」

見慣れた自分の寝室だが、いつのまに眠ったのだろうか…？

「グッドモーニング！起きた？」

ジヨディが手に何やら携えて部屋に入ってきた。

「おかゆ、作ったんだけど、食べれる？」

ジヨディはベッドの横のサイドテーブルにお盆を置き、椅子に腰掛けた。

ああ、そうか。思い出した…。

鉛を載せられているかのように心が重くなる。

胸が締め付けられ痛い。

苦しい…。息が…出来ない。

「ちょっと、大丈夫…？」

ジヨディは俯いたままの赤井を怪訝に思い、尋ねた。

「…食べれる？」

そう言いスプーンを差し出す。

そういえば、以前にもこんなことがあったような気がする。あれは、いつだったろうか…。

差し出されたスプーンから立ち昇る湯気に少しほっとする。しかし、食欲が出て来ない。

そして、赤井はまた視線を戻した。

「…ここに置いておくからね?」

眉を寄せ、何かに耐えているかのような赤井にジヨディは心を痛めた。

「…もう少し眠りなさい。それと、これを飲んで。落ち着くわ。」

そう言うと、赤井に水の入ったグラスと薬を二錠渡した。しばらく赤井は焦点の合わない目でそれらを眺めていたが、おとなしくジヨディに従った。

ジヨディはそんな赤井の様子を見守り、しばらくして彼が眠りに落ちたのを確認すると寝室をあとにした。

パタン…

ポロ

零れてくる涙が止まらない。

「弱ったわねえ…。」

誰が見ているわけではないが、片手で顔を覆った。

「…はあ…。」

まさかこんなことになるとは…。

あの赤井が…。

なんとかしないと、このままじゃ彼…。

太陽が頭上に昇る頃

「彼、今は休憩に入っている時間よね？」

そつ独り言を言いながら、どこかに電話をかけた。

「ええ、そうなの。悪いけどお願いできる？ええ、ごめんなさいね。それじゃあ。」

水平線の向こうに太陽がその姿を隠してからしばらくして

ブーブー

携帯のバイブが鳴った。

着信 ロバート

ガチャ

ジヨディは玄関に行き、扉を開けた。

「いらつしゃい。」

「すみません、インターホン、鳴らさないほうが良いかと思ったので…。」

ロバートは気を配ってそう小声で言った。

「いいのよ…。それより、ごめんなさい。買い物なんて頼んでしまつて。」

「いえ、構いませんよ。特売には間に合いませんでしたけどね。」
と、肩を竦めて言った。彼のこういうさり気無い気遣いに心が癒される。

「…Mr・赤井は？」

「眠ってるわ…。」

「…そうですか。」

ジヨディに案内されて、ロバートは寝室に行った。部屋の窓際に位置するベッドに赤井は眠っていた。

呼吸は穏やかだが、顔色は今だ悪い。

ロバートはこんな上司の姿を今まで一度たりとも見たことがなかった。彼の中の赤井は、どんな苦境に立たされていようと、常に余

裕を持ち、不敵な笑みを浮かべていた。決して他人に弱さを見せない。それが赤井だった。

「…謹慎になってからもう数週間経つていうのに、彼、ろくに眠りもしていなかったみたいなの…。」

ジョディの言葉にロバートは顔を曇らせた。

「…。M S・スターリングも休んでください。ここは自分が看ますので。昨日からずっと付きっ切りだったんですよね？」

「ええ…。」

ロバートに向けていた視線を再び赤井に戻して言った。

「…そうね。じゃあ、お願いするわ。何かあったら呼んでちょうだい…。」

そうして、ジョディは2人を残して、部屋をあとにした。

第8話：決して消えることはない

それから、ほとんど毎日のようにジョディは仕事が終わると、ロバートと共に赤井の様子を見に行った。

自宅からは大分離れているが、あの状態の彼を、独りで家にいさせるのは心配だった。

最近では、本庁と彼の家の往復のような気がする。

「…シュウ、お願いだから少しは食べてちょうだい…。そんなんじや、良くなるものも良くならいわよ?」

せめて何か口にしてほしい。

赤井はもう何日も何も食べていなかった。これでは糞^{やっ}れる一方だ。

赤井は俯いたまま、相変わらず焦点の合わない目で一点を見つめている。

どうしたら彼を元気付けられるのだろうか。

「シュウ…?」

ジョディは赤井の手を取ろうとしたが、その前に赤井がジョディの手を払いのけた。

「…もう構うな。」

そう言った赤井の瞳は、驚いたことに揺らいでいた。

「そんなこと出来るわけないでしょ。…皆、あなたを心配しているのよ?」

「こっちは頼んだ覚えはないがな。」

「シュー！」

室内に気まずい空気が流れる。ジョディの隣にいるロバートは2人を交互に見てあたふたしている。何か言った方が良いのかと考えを巡らせているようだが、なかなか思いつかないようだ。

「お前に何がわかる。」

そう言い、ジョディを睨んだ赤井の眼光は鋭かった。

どれだけ泣き叫ぼうとも、もう彼女は還ってこない。

彼女を殺したのは自分。自分が何の罪もない彼女を利用したばかりに……！

そう思えば思うほど、胸が締め付けられ、今にも張り裂けそうだった。

視界が歪む。

「構うなっと言ったはずだ。」

第一、俺が死のうが死ぬまいがお前には関係ないだろう……！」

パンツッ

乾いた音が室内に響き渡った。

「ミ、MS・スターリング!?」

「いい加減にしなさいよ……」

ジヨディは声を震わせながら、言った。

「お前には関係ないですって！？ふざけるんじゃないわよ！！大事な人を失うことがどんなに辛いことか私はもう嫌ってほど知ってるわっ……！」

ジヨディの目から自然と涙が零れてくる。

「あなたが死んだら悲しむ人は大勢いるのよ！？あなたを慕っている捜査官達やここにいるロバート、私も！みんな悲しむわよ！！それに、それに、彼女だってそうよ！私はよくわからないけど、彼女はあなたを愛していたんでしょ！？どこに自分の好きな人が辛い思いしてて喜ぶ人間がいるのよ！！どうしてそれがわからないの！！？」

ジヨディは恐ろしい剣幕で一氣にまくし立てた。彼女の頬には涙の跡が幾筋も出来ていた。

先程までは虚ろだった赤井の瞳は、今は確かにジヨディを映している。

しかし、彼は無言のまま、ふらつく体を支えるようにしてベッドから抜け出すと、部屋から出て行った。

家の外にでると、凍りつくように冷たい夜風が容赦なく肌に突き刺さった。今の身体にはこの寒さは流石に堪える。

車庫に回り、愛車のシボレーに乗る。

あの場にいるのは耐えがたかった。

涙…。

今でも、あの時の彼女の泣き顔が頭に焼き付いて離れない。

…明美…。

考えなくてはならないが、考えれば考えるほどに混乱してくる。

痛い…。頬ではなく。心が。

押し寄せ、決して消えることのない想いを抱きながら、海沿いの道を当てもなく走った。

第9話：涙の向こう岸…決意と共に。

深夜、自宅に戻り風呂からあがると、テーブルの上に置いてあった携帯の着信ランプが光っていた。
携帯を開けるとメールが一件。

差出人 赤井秀一

（！……何、かしら？）

あんなことがあったばかりだから、メールを見るのが躊躇われる。
しかし、見ないわけにはいかない。
はやる動悸を抑えて開けた。

『話がある。明日午前7時、ワシントン・ダレス国際空港。』

それだけ。至ってシンプルなメールだった。まあ、彼から凝ったメールが届いたことなんて一度もないが…。
でも、一体そんな朝早くに何の話かしら？

午前7時ってこつちを1時間前に出ないといけないじゃない。私に何時に起きろって言うてんのよ…！

最近の疲労もあってかジョディは段々腹が立ってきた。

そして、約束の時間。

空港のどこに待ち合わせなのか聞いていないことに気がついた。こ

の空港は非常に広く、とてもじゃないが探すのは無理だ。電話をかけ、どこにいるのか尋ねた。

言われた場所に行き、呼び出した張本人を探すが見つからない。長髪にニット帽なんて珍しい格好、すぐに見つかると思うのに…。

「一体、どこにいるのよ…。」

そう悪態つき、電話をしようとしたとき

「ジョディ…?」

不意に後ろから声かけられた。

「もう、探したわよ。一体どこにいて…?」

その後は言葉が続かなかった。いや、出てこなかったと言っべきかなぜなら…

なぜなら、昨日までは確かにあった長い髪が無くなっていたからだ。

「シ、シュウ??あ、あなた、髪切ったの!??」

やつのことで出た声は動揺で上ずっていた。

「ああ。」

そんなジョディの気持ちも知らず、赤井はさらりと言った。

あんなに伸ばしていた髪をばっさり切るなんて…。

ジヨディはまだ目の前の事実を受け入れられなかったが、平静を取り戻して肝心なことを聞いた。

「…それで、話って？」

赤井は改めてジヨディの方を向いて言った。

「日本に行ってくる。」

ジヨディは突然の赤井の言葉に目を丸くした。

「組織を追う。」

しかし、向けられた眼差しは決意に満ちていた。

「シュウ…。」

彼が立ち直ってくれて良かったと思う。心の底から。だけど、1つだけ引くかかることが…。

「…あなた、謹慎中だっってこと忘れてない？」

「そこは頼む。」

呆れる。

「はあ…。まあ、いいわ。ボスには上手く言っておくから。」

「…すまない。」

謝るんなら、もう少しすまなそうな顔してよね…。ボスに怒られるのは私なんだから…。

あ、そうだ。ロバートにも巻き込まれてもらおうかしら？

「…お前のおかげだ。」

「…私は何もしていないわ。」

本当に何もしていない…。あなたは、誰の助けも借りずに独りで立ち直ったのよ…。悔しいけどね…。

最近、緩かった涙腺が更に緩くなる。

そのとき、赤井はジョディの正面に立ち、彼女の耳元の顔を近づけた。

え…！！？

ジョディは、外に聞こえるのではと心配してしまうほど動悸が高鳴り、顔が熱くなるのがわかった。
フライトのアナウンスや周囲のざわめきが一気に遠くなった。

「……。」

彼は自分の耳元で何かをささやいた。

―えっ？

今、なんて…？

「じゃあ、行ってくる。」

赤井はそう言うと、搭乗ゲートに向かった。

ジヨディはその後ろ姿をポカンと眺めていた。

あまりに突然の出来事だったので、気をつけて、と言い忘れてしまった。

まだ心臓がときどきしてる。

『…ありがとう…。』

顔を近づける前の彼が少し微笑んでみえたのは自分の勘違いだろうか？

どこまでも澄み渡る青空に一本の飛行機雲が描かれた。

それから数週間後のことだ。

私に、日本での潜入捜査の任務が入ったのは。

第9話：涙の向こう岸…決意と共に。（後書き）

こんにちは！

やっと終わりました。もう最近忙しくて大変でしたが書ききれて良かったです！

最後まで読んでくださって本当にありがとうございました

急いで打ったので、誤字脱字等がありましたら教えてください！訂正します（<—>）

では、これからもどうぞよろしくお願いします♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8899e/>

泪～さようなら～

2010年10月9日06時06分発行